

## 『西廂記』と八股文について―「唐六如先生才子文」を中心に―

樊 可 人

### はじめに

八股文は、明清時代の科挙で用いられた文章の形式である。四書五経の一、二句あるいは数句を題として、受験生に、古人に成り代わってその意味を敷衍させた。こうした官僚選抜の道具としての八股文が存在する一方で、科挙の決まりに囚われず、小説や戯曲などを題材に、遊戯として書かれる八股文も存在した。

その中の、『西廂記』の曲文を用いて作られた八股文について、黄霖氏は次のように紹介する<sup>1)</sup>。

清の康熙年間に、尤侗は八股体を用いて「怎当他臨去秋波那一轉」を作り、当時の皇帝に称賛され、一時「名は上林に噪がれた」。その後、八股の形式で『西廂記』の名句を賛評する一連の文章が大量に現れた。これらの文章は、いずれも『西廂記』の中の名句を題目にする。例えば、「怎当他臨去秋波那一轉」、「隔牆兒酬和到天明」（中略）などである。『西廂記』の

中の名句を題目にしてモノグラフを作るこの類の文章として、最も早く確認できるのは明の万曆八年（一五八〇年）に徐士範が刊行した『重刻元本題評音釈西廂記』である。（中略）清代には、尤侗が八股体を用いて「怎当他臨去秋波那一轉」を作った直後に、黄周星が積極的に呼応して「怎当他臨去秋波那一轉」の題で次々と六篇の文章を書き、「秋波六芸」と名づけた。その後、模倣する者が続出し、多くの作品集が出た。例えば、錢書の『雅趣藏書』、「念庵居士輯め、祝枝山評す」と題する「唐六如先生文韻」、「太史陳維崧其年訂す」と題する「才子西廂醉心篇」などが、しばしば『西廂記』の付録として刊行され、広く流伝した。

右の紹介文に見える「唐六如先生文韻」は十六篇の八股文より構成されており、いくつかの『第六才子書』版本に収録されるほか、清代に刊行された『巾箱小品』にも「才子文」（内題は「唐六如先生才子文」と題して収め

られる。作品名に見える「唐六如先生」とは、明の唐寅（一四七〇年―一五二三年）のことである。字は伯虎、子畏、号は六如など。若い時から俊才をうたわれ、徐禎卿、祝允明、文徵明らとともに「吳中四才子」と称された。また後述するが、唐寅や祝允明は科挙に合格することができず、晩年は郷里に帰り、放縦な生活を送った。

「唐六如先生文韻」（才子文）のほか、いくつかの『第六才子書』版本には「六才子西廂文」や「十名家西廂文」といった『西廂記』に関する作品が付されているが、その中にも、作者を唐寅とするものが見られる。しかし、王穎・黄強両氏はこれらの作品に詳しく考察を加え、すべて贋作だと指摘した<sup>2)</sup>。そしてさらに、「唐六如先生文韻」（才子文）は清の文筆家か本屋が利益を得るために新たに作ったものだと言張した<sup>3)</sup>。

一方、大木康氏は唐寅に仮託した八股文は確かに存在すると認めつつも、「才子文」が果たして贋作であるのかどうかについては疑問とする。氏は、『原文で楽しむ明清文人の小品世界』で次のように述べる<sup>4)</sup>。

唐寅には、釈解本系の『西廂記』に仮託されたものばかりではなく、あるいはほんとうに唐寅のものであるかもしれない『西廂記』の八股文がある。清代に刊行された『巾箱小品』中に収められる「才子文」がそれである。ここに収める十五篇の題目は、これまで見た貫華堂本『西廂記』の「六才子西廂文」とも、

『雅趣藏書』（また釈解本系）とも一つとして一致しない。その冒頭には祝允明による「才子文序」が付されているが、果たしてこの「才子文」が本物であるとすれば、唐寅と『西廂記』八股文との関わりは、より古くまでさかのぼることになる。

ただ、「才子文」が本当に唐寅の作かどうかについては、これ以上の検討は行われておらず、作品の成立経緯や編纂目的などとともに、詳しく検討する余地がある。

ところで、『巾箱小品』は嘉永三年（一八五〇年）に日本に伝来した記録が残っており<sup>5)</sup>、文久三年（一八六三年）には和刻もされていることから<sup>6)</sup>、江戸後期の人にも読まれたと考えられる。したがって、その中に収められる「才子文」は、日本における『西廂記』の受容問題を考える上でも非常に重要だと言える。

本稿では、「唐六如先生文韻」（才子文）に着目し、その収録状況や成立経緯、編纂意図について論述したい。また、その日本における受容についても、筆者の考えを述べたい。

### 一 「唐六如先生文韻」（才子文）の収録状況

王・黄両氏の調査によると、以下の作品に「唐六如先生文韻」（才子文）が収録されている<sup>7)</sup>。

光緒十三年古越全城後裔校刊石印本『増像第六才子

書』

光緒十五年潤宝齋石印本『増像第六才子書』

清華韻軒刻巾箱小品本「唐六如先生才子文」

民国二年掃葉山房石印本『増訂金批西廂』

民国十三年上海啓新書局『繪図西廂記』

民国十六年上海掃葉山房『繪図西廂記』

民国二十二年掃葉山房『繪図西廂記』

三番目に見られる『巾箱小品』は、編者や刊行年などが一切書かれていないが、前述したように嘉永三年（一八五〇年）に日本に伝来しているため、上記の書目の中では最も古いものだと考えられる。この『巾箱小品』には華韻軒版とは異なる版が少なくとも一つあり<sup>8)</sup>、その第四冊に収められる「才子文」には、文字の異同が多々見られる。九州大学附属図書館益田文庫所蔵の『巾箱小品』がそれである（以下、益田本と呼ぶ）。華韻軒版『巾箱小品』の第一冊の扉に「華韻軒蔵版」とあるのに対し、益田本にはそれが見られない。以下、益田本と上海図書館所蔵の華韻軒版『巾箱小品』（以下、上図本と呼ぶ）「才子文」の異同について説明する。

まず、「蘭麝香仍在佩環声漸遠」という張生（『西廂記』の男主人公）の歌詞を題とする文章について、次のような例がある。なお、文字を囲む四角は筆者による。

#### \*益田本

春陰鎖翠、空教意馬爭馳。所冀<sup>鸞</sup>語之非遙耳。（中略）  
吾独怪小姐既去、不若香与声之繞於我<sup>側</sup>也。  
\*上図本  
春陰鎖翠、空教意馬爭馳。所冀<sup>鸞</sup>語之非遙耳。（中略）  
吾独怪小姐既去、不若香与声之繞於我<sup>側</sup>也。  
女主人公である崔鶯鶯が去った後、彼女を恋しく思う張生の感情が強く伝わってくる。両本を見比べると、益田本の三句目に見られる「鶯語」を、上図本は誤って「罵語」に作っており、益田本の文末に見られる「我側」を、上図本は誤って「我訓」に作っている。また、題名の「蘭麝」を、上図本は誤って「蘭第」に作っている。

このほか、「他説小姐你權時落後」という紅娘（崔鶯鶯の侍女）の歌詞を題とする文章にも似たような例が見られる。

#### \*益田本

<sup>他</sup>説小姐、你莫若夫人之<sup>恩</sup>讐不辨也。

#### \*上図本

<sup>地</sup>説小姐、你莫若夫人之<sup>恩</sup>讐不辨也。

一句目の「他」を、上図本は誤って「地」に作っており、二句目の「恩讐」を、上図本は誤って「思讐」に作っている。先に見た「蘭麝香仍在佩環声漸遠」の例の「蘭第」を除き、上図本では、以上の誤りを手書きで修正してい

るほか、文字がはつきりしないところを手書きで補っている箇所がいくつかあることから、華韻軒版の『巾箱小品』より益田本のほうがさらに古い版本だと考えられる。

これらの版本の他、「唐六如先生文韻」（才子文）に見える十六篇の作品が鈔本として残されたものもある。現在東京大学東洋文化研究所倉石文庫に所蔵される『西廂制義』がそれである。その表紙には朱筆で書かれた「文家靈劑」の四字が、本の中には朱筆による夾批や圈点が見られるが、それらはもとからあったものではないと考えられる。黄仕忠氏が『日藏中国戯曲文献綜録』において「清精鈔本」としか書いていないように<sup>9)</sup>、当鈔本の成立年代に関するこれ以上の詳しい情報は分からない。しかし、『巾箱小品』の「才子文」と見比べると、序文の内容が全く違うことに気が付く。

まず、『巾箱小品』に「祝允明 題す」と書かれる「才子文序」は次のようである。

八股代聖賢以立言也。『西廂』一書固已無足道矣。乃以之命題不幾作為無益乎。雖然第患其文之不工耳。文之工者無在不足以啓發人之聰明、而令人悠然以思、有因此識彼之妙焉。吾友六如先生倚馬千言、著作甚富。茲帖則其游戲筆墨也。然每拈一題、語無泛設、筆有餘妍、而且起承開闔之法、抑揚頓挫之致、靡不畢具於斯。噫嘻、技至此、神矣、化矣。因為評定、俾誦是書者、觸目会心、開卷輒得。誠使學業之士有

以探其微而尽其妙、則所裨益寧淺鮮耶。

八股は聖賢に代はりて以て言を立つるなり。『西廂』の一書固より已に道ふに足る無きなり。乃ち之を以て題を命ずるは作益無しと為すに幾からざらんや。然りと雖も第だ其の文の工ならざるを患ふのみ。文の工なる者は以て人の聰明を啓発するに足らざるに在る無く、而も人をして悠然として以て思ひ、此れに因りて彼の妙を識る有らしむ。吾が友六如先生倚馬千言にして、著作甚だ富む。茲の帖は則ち其の游戲の筆墨なり。然れども一題を拈する毎に、語に泛設無く、筆に餘妍有り、而も且つ起承開闔の法、抑揚頓挫の致、畢く斯に具はらざる靡し。噫嘻、技此に至るは、神なり、化なり。因りて評定を為し、是の書を読む者をして、目に触れば会心し、巻を開けば輒ち得しむ。誠に學業の士をして以て其の微を探りて其の妙を尽くすこと有らしむれば、則ち裨益する所寧くんぞ淺鮮ならんや。

序文の内容によると、唐寅は遊びのつもりでこれらの文章を書いたが、科挙を目指す者たちが読んでも、必ず勉強になるという。これに対し、『西廂制義』には、「允明先生総評」と題される「西廂制義序引」があり、次のように述べている。

伯虎先生所貽於後世者、惟詩画最多、而學業独鮮。

今得此十六義、三復流連、朝吟暮誦、直覺風雲吐於行間、珠玉生於字裏。而其出落轉接、句句化工、散整短長、篇篇神巧、堪與『西廂記』並伝不朽。若舉業家出筆粗俗冗腐者、直以當三年之艾耳。

局緊而舒、意新而亮、辭雋而馴、更妙在崔張紅惠各是一種神情、絶不相蒙、離合悲歡、各是一般筆墨、絶不相襲。会元正派、於此得之。

伯虎先生的後世に貽る所は、惟だ詩画最も多くして、挙業独り鮮なきのみ。今此の十六義を得、三たび復た流連し、朝吟暮誦し、直だ風雲行間に吐き、珠玉字裏より生ずるを覚ゆ。而して其の出落轉接、句句化工し、散整短長、篇篇神巧にして、『西廂記』と並びに伝へて朽ちざるに堪ふ。挙業家の出筆すること粗俗冗腐たる者の若きは、直だ以て三年の艾に当たるのみ。

局緊にして舒やかに、意新しくして亮らかに、辞雋れて馴く、更に妙なるは崔張紅惠各是れ一種の神情、絶えて相ひ襲はず、離合悲歡、各是れ一般の筆墨、絶えて相ひ襲はざるに在り。会元の正派、此に於いて之を得たり。

最後の一文に多少疑問を覚える点はあるものの<sup>〔10〕</sup>、本書は唐寅の優れた八股文の作品を残すことを目的として編まれたことが分かる。

『西廂制義』の細部の表現を見てみると、『第六才子書』

5	繡幃開遙見英雄俺	解困	寺警
6	我從來心硬一見也留情 初筵請宴	我從來心硬一見了也留情	請宴
7	虛名兒誤賺了我	虛名兒誤賺我	賴婚
8	別恨離愁做這一弄	別恨離愁做這一弄	琴心
9	管教那人來探你一遭兒	管教那人來探你一遭兒	前候
10	半晌擡身幾回搔耳一聲長嘆 窺簡	半晌擡身幾回搔耳一聲長歎	開簡
11	便做道樓得慌也索觀咱 踰牆賴簡	便做道樓得慌也索觀咱	賴簡
12	從今後由他一任 問病後候	從今後由他一任	後候
13	你必破工夫今夜早些來 佳期酬簡	你破工夫今夜早些來	酬簡
14	他說小姐你權時落後 巧辨考艷	他說小姐你權時落後	拷艷
15	倩疎林你為我掛住斜暉	倩疎林你与我挂住斜暉	哭宴
16	嬌滴滴玉人何処也	嬌滴滴玉人何処也	驚夢

両方とも、各題名の後ろに出典を表す『西廂記』の標目が付いている。「才子文」の標目は、多くの『西廂記』版本のうち、『第六才子書』系統の章節名としか一致しない。ただし第十四篇の「他說小姐你權時落後」と第十六篇の「嬌滴滴玉人何処也」は『樓外樓訂正妥註第六才子書』に見られる曲文としか合致しないが<sup>〔13〕</sup>、第十五篇の「倩疎林你与我挂住斜暉」は、『樓外樓訂正妥註第六才子書』では「倩疎林你与我挂住斜暉」となっていて一致しないため、どの『第六才子書』版本に従ったのか、今のところ不明である。

に付される「唐六如先生文韻」及びそれとほぼ同内容の『巾箱小品』所収「才子文」とは一致していないことが分かる。そこで次に、各文章の題名及びその本文を比較することによって、『西廂制義』が基づいた『西廂記』の版本は『第六才子書』系統ではない可能性が高いことを示したい。

二 「唐六如先生文韻」（才子文）の成立経緯と編纂意図

もともと八股文は、四書五経の中から文句を選んで文章を書くため、『西廂記』から出題する場合は、その題目は当然ながら、『西廂記』に見られる表現を使うことになる。

筆者が調査したところでは、『巾箱小品』の「才子文」と『第六才子書』に付される「唐六如先生文韻」の各文章の題目は一致しているが<sup>〔1〕</sup>、『西廂制義』の題目は、それらとは若干異なる。次の表は、『西廂制義』と「才子文」に収録される十六篇の八股文の題名を比較したものである<sup>〔12〕</sup>。

『西廂制義』		『巾箱小品』「才子文」	
1	蘭麝香仍在環佩声漸遠 奇逢驚艷	蘭麝香仍在佩環声漸遠	驚艷
2	你不合臨去也回頭望 飯寓借廂	你不合臨去也回頭望	借廂
3	今夜我去把相思投正 聯吟酬簡	今夜我去把相思投正	酬簡
4	仏囉成就了幽期密約 開會開齋	仏囉成就了幽期密約	開齋

これに対し、『西廂制義』の各題名の後ろに付けられた標目は、『第六才子書』系統とはあまり一致しないものの、明の崇禎年間に刊行された『三先生合評元本北西廂』の各套の標目とは完全に一致する<sup>〔1〕</sup>。また、『西廂制義』には、各題名の後ろに付けられた標目のいくつか、さらに小さく書かれた標目が見られるが、目録には「奇逢」「飯寓」といった十六個の標目しか書かれていないことから、それらは抄写の際に『第六才子書』を参考にしながら書き加えられたものだと考えられる。一方各題名については、第十五篇の「倩疎林你為我掛住斜暉」が、『三先生合評元本北西廂』では「恨不得倩疎林掛住斜暉」となっていることから、必ずしもそれを参考にしたとは限らない。ただ、「倩疎林你為我掛住斜暉」は『第六才子書』では「倩疎林你与我掛住斜暉」となっているため、『西廂制義』が基づいた『西廂記』版本は『第六才子書』でない可能性が高い。

この他、内容の異同から見ると、『西廂制義』は『第六才子書』に付される「唐六如先生文韻」が作られる際に、「才子文」とともに参考にされたことが分かる。例えば、それぞれの「蘭麝香仍在環佩（佩環）声漸遠」を題とする文章は次のようになっている。

\* 『西廂制義』

〔昔〕①聞漢皋之佩、可解以訂相思。不願小姐之投〔2〕我以瓊瑤、而願其互〔3〕我以環佩〔4〕矣。不識小姐之意属

我否、但就⑤徘徊之頃、而覺素袖飄⑥揚、有隨之而若⑦停者。(中略)誰無環佩⑧之韻⑨、而一經微步、則其声倍和。

#### \*「才子文」

又①開漢皋之佩、可解以訂相思。不願小姐之報②我以瓊瑤、而願其投③我以環佩④矣。不識小姐之意屬我否、但從⑤徘徊之頃、而覺素袖悠⑥揚、有隨之而不⑦停者。(中略)誰無環佩⑧之韻⑨、而一經微步、則其声倍和。

#### \*「唐六如先生文韻」

晉①開漢皋之佩、可解以訂相思。不願小姐之報②我以瓊瑤、而願其投③我以環佩④矣。不識小姐之意屬我否、但使⑤徘徊之頃、而覺素袖飄⑥揚、有隨之而不⑦停者。(中略)誰無環佩⑧之韻⑨、而一經微步、則其声倍和。

まず、①では、「唐六如先生文韻」と『西廂制義』は一致しているのに対し、「才子文」は「又」となっている。しかし②と③では、「唐六如先生文韻」と「才子文」はそれぞれ「報」と「投」となっているのに対し、『西廂制義』は「投」と「与」となっている。また、④になると、「唐六如先生文韻」は「環佩」となっているのに対し、『西廂制義』と「才子文」は「環佩」となっている。しかし、⑤では、「唐六如先生文韻」は「使」、「西廂制義」は「就」、「才子文」は「從」と、それぞれ異なる字に作っている。

これも、「唐六如先生文韻」は『西廂制義』と一致するところもあり(③、⑤、⑦)、「才子文」と一致するところもあつて(①、②、④、⑥)一定しないが、⑦で、「唐六如先生文韻」が「○」印を付けた後、『西廂制義』に見られるのと同じ文章を写していることから、「唐六如先生文韻」は「才子文」を底本にし、さらに『西廂制義』を参考にして作られたものではないかと思う。

金聖嘆の『第六才子書』は順治年間に刊行された後<sup>15)</sup>、それまでに作られた夥しい『西廂記』版本を圧倒し、主流となった。王応奎の『柳南隨筆』卷三に、金聖嘆と『第六才子書』について次のような記述がある<sup>16)</sup>。

金人瑞、字若采、聖歎其法号也。(中略)好評解稗官詞曲、手眼独出。初批『水滸伝』行世、崑山歸元恭莊見之曰、「此倡乱之書也。」繼又批『西廂記』行世、元恭見之又曰、「此誨淫之書也。」顧一時學者、愛読聖歎書、幾于家置一編。

金人瑞、字は若采、聖歎は其の法号なり。(中略)稗官詞曲を評解するを好み、手眼独り出づ。初めて『水滸伝』を批して世に行はれ、崑山の歸元恭莊之を見て曰く、「此れ倡乱の書なり」と。繼ぎて又た『西廂記』を批して世に行はれ、元恭之を見て又た曰く、「此れ誨淫の書なり」と。顧だ一時の学ぶ者、聖歎の書を読むを愛し、家ごとに一編を置くに幾し。

さらに、⑥から⑨についても、「唐六如先生文韻」は『西廂制義』と「才子文」いずれかと合致するところもあれば(⑥、⑦)、それら二者とは異なる表現を使っているところもある(⑧、⑨)。

また、「嬌滴滴玉人何処也」という文章の評語には、次のような異同がある。

#### \*「西廂制義」

人做①一得意夢、到初醒時、每恨此夢之易醒、況②妄想睡去再得統此夢。張生此時③、即④是此境⑤也。(中略)我却於張生說夢時、不⑥見玉人、不勝快活。天下功名富貴、莫非夢也。一旦失勢、真有一何処也一之歎。⑦

#### \*「才子文」

人做①一得意夢、到初醒時、每恨此夢之易醒、且②妄想睡去時再統此夢。張生此時③、正④是此境⑤也。(中略)我却於張生說夢時、得⑥見玉人、不勝快活。

#### ⑦

#### \*「唐六如先生文韻」

人做①一得意夢、到初醒時、每恨此夢之易醒、且②妄想睡去時再統此夢。張生此時③、正④是此境⑤也。(中略)我却於張生說夢時、得⑥見玉人、不勝快活。○天下功名富貴、莫非夢也。一旦失勢、真有一何処也一之歎。⑦

また、愈樾は「明代所行『西廂記』皆李日華本、自金聖歎外書行而李本廢矣(明代に行はるる所の『西廂記』は皆李日華本にして、金聖歎の外書行はるるに自りて李本廢るるなり)」と述べ<sup>17)</sup>、吳梅が『第六才子書』が出た後、他の『西廂記』版本が受けた影響について<sup>18)</sup>、

『西廂』之工、人所共喻。即無聖歎、何嘗不伝。吾謂自有聖嘆、而『西廂』乃真不伝也。何也。蓋時俗所通行者、非実甫之『西廂』、聖嘆之『西廂』也。而読『西廂』者、則以聖嘆之『西廂』、即為実甫之『西廂』也。二者交整、而『西廂』之真本、乃為孟浪漢所攢。是今日所行之『西廂』、非真正之『西廂』、而『西廂』乃竟無伝本。即間有伝者、皆為藏弄家之珍秘、而世莫能遵焉。吾於是為実甫悲也。

『西廂』の工なるは、人の共に喩する所なり。即ひ聖嘆無きも、何ぞ嘗て伝はらざらん。吾謂へらく聖嘆有りて自り、而して『西廂』乃ち真に伝はらざるなり。何ぞや。蓋し時俗の通行する所は、実甫の『西廂』に非ず、聖嘆の『西廂』なればなり。而して『西廂』を読む者、則ち聖嘆の『西廂』を以て、即ち実甫の『西廂』と為すなり。二者交整して、『西廂』の真本、乃ち孟浪の漢の攢く所と為る。是れ今日行はるる所の『西廂』、真正の『西廂』に非ずして、『西廂』乃ち竟に伝本無し。即ひ間伝はる者有るも、皆藏弄家の珍秘と為りて、世能く遵ゆる莫きなり。吾

是に於いて実甫の為に悲しむなり。

と述べるように、『巾箱小品』の「才子文」や『第六才子書』に付される「唐六如先生文韻」が刊行される頃に世間で流通していたほとんどの『西廂記』版本は、『第六才子書』系統のものであったと言えよう。そのため、鈔本として残された『西廂制義』が、当時最も流通していた『第六才子書』に見られる標目や題名ではなく、あえて明刊『西廂記』に見られる標目や題名を採用したことから、それは営利のために作られたものではないと考えられる。したがって、『西廂制義』は『巾箱小品』の「才子文」よりも前に成立したものだと言えよう。

唐寅と祝允明が正式に会試を通過することができなかったことを考えれば<sup>[19]</sup>、前に挙げた『西廂制義』の序文の最後に「会元の正派、此に於いて之を得たり。」とあるのは、まさに科挙制度に対する皮肉であり、「嬌滴滴玉人何処也」の評語に「天下の功名富貴、夢に非ざる莫きなり。一旦勢ひを失へば、真に『何の処ならん』の歎有り。」とあるのも、唐・祝らしい感情の発露と言えよう。

弘治年間に刊行された『新刊大字魁本全相參增奇妙注釈西廂記』（弘治本）には、西蜀壁山来鳳道人が著した「新增秋波一転論」と国學生が撰した「鬆金釧減玉肌論」が収録されていることから、唐寅の時代には、すでに『西廂記』について論じる文章が現れていたと考えられる。しかも、明の何大成が編纂した『唐伯虎先生外編』には、

「才子文」より前に成立したと考えられる『西廂制義』は、他人に八股文を勉強させるつもりで書かれたものではないが、『巾箱小品』はそれを八股文の勉強に有益となるように手を加え、それは後に『第六才子書』にも取り込まれた。『巾箱小品』と『第六才子書』に収められる「唐六如先生文韻」（才子文）は出版者が利益を得る目的で取り入れたものであるのに対し、『西廂制義』所収の文章は、唐寅が自らの問題意識によって作った、彼の真作である可能性がある。

### 三 日本における受容状況

上に示した十六篇の八股文は、中国ではいくつかの『巾箱小品』や『第六才子書』版本によって人々に読まれたのに対し、日本では伝来された『第六才子書』や『巾箱小品』のほかに、『巾箱小品』の和刻本によって、人々に読まれたと思われる。

江戸後期に文人たちの『西廂記』に対する関心が高まったことや<sup>[23]</sup>、中国の書画に興味を持つ人が増えたことが、『巾箱小品』が和刻された要因であると考えられる。

『巾箱小品』には、「才子文」のほかに、『西廂記』にある曲文で作られた「西廂記酒令」や、金農、鄭燮の作品も見られる（『冬心先生画記五種』『冬心斎研銘』『板橋題画』）。また、卷三に収録される唐岱の『絵事發微』は、『巾箱小品』の前に刊行されていた<sup>[24]</sup>。これらのことから、『巾箱小品』は当時の文人趣味に合っていたと言え

「鶯鶯待月」という『西廂記』故事の女主人公である崔鶯鶯を詠じる詩が見られ<sup>[25]</sup>、さらに同書の卷三に次のような『西廂記』と関わりがある話が収められている。

唐子畏客江陰夏氏。款洽浹旬、乞画、久未落筆。一日晨起、作『鶯鶯図』、題詩云、「扶頭酒醒宝香焚、戲写蒲東一片雲。昨夜隔牆花影動、猛聞人語喚双文。」大凡詩画興至、則工況名流乎。

唐子畏江陰の夏氏に客たり。款洽すること浹旬にして、画を乞はれ、久しくして未だ筆を落とさず。一日晨に起き、『鶯鶯図』を作り、詩を題して云ふ、「扶頭して酒醒めて宝香を焚き、戯れに写す蒲東の一片の雲。昨夜、牆を隔てて花影動き、猛に聞く人語双文を喚ぶを」と。大凡詩画の興至れば、則ち工なること名流に況へんや。

詩の三句目に見られる「牆を隔てて花影動く」という表現が弘治本『西廂記』では一致しているのに対し、元稹の「鶯鶯伝」では「牆を払ひて花影動く」となっていて異なることから<sup>[26]</sup>、唐寅は『西廂記』を見た可能性が考えられる。

『西廂制義』の成立年代ははっきりしないが、以上のことを踏まえると、唐寅は敢えて『西廂記』を借りて八股文の形式で文章を書き、それによって自分の不遇を託ったという可能性は否定できないだろう<sup>[27]</sup>。

るだろう。

「才子文」の作者として名前が記される唐寅も、古くから日本の文人に愛された一人であった。日本の文人画の先駆者として知られる祇園南海は、「題唐伯虎先生名山卷」で唐寅のことを次のように詠じている<sup>[28]</sup>。

六如丹青出人間　六如の丹青　人間に出で  
盧岳天台入仙寰　盧岳天台　仙寰に入る  
非是江南第一士　是れ江南の第一士に非ずんば  
争写天下無双山　争でか天下無双の山を写さん

また、田能村竹田は『山中八饒舌』（巻下）で「近日題画詩、学宋元及明人唐祝輩、頗得其趣。（近日の題画詩、宋元及び明人の唐祝の輩を学び、頗る其の趣を得たり。）」と述べる。さらに、「巨障長卷、宜七言歌行、少陵最為当行。小幅冊頁、宜五七言絶句、或断句題之、亦佳。唐、祝迺為本色。（巨障長卷は、七言歌行に宜しく、少陵最も当行と為す。小幅冊頁は、五七言絶句に宜しく、或いは断句もて之を題するも、亦た佳し。唐、祝、迺は本色と為す。）」と指摘していることから<sup>[29]</sup>、唐寅は画だけではなく、詩も高く評価されていたことが分かる。また、「才子文」序の作者である祝允明も、学ぶ対象となっていたようである。

このように、江戸後期の文人趣味に合う風雅な作品が多く収録されていた『巾箱小品』は、和刻されてもおか

しくないものであったと言えよう。その和刻本の旧蔵者の一人は河野鉄兜であるが<sup>[2]</sup>、彼は自らの随筆集『振觚』で「蘭室画ヲ作ル、四君子ノ類多シ。松南頗書風アリ、韻致スグレタリ。南郭アタリヨリ以下、画ヲヨクスル文人多シ。コレ書法運筆ノヒラケタル故ナルベシ。」と述べていることから<sup>[28]</sup>、絵画に関心があつたようである。それは彼が『巾箱小品』を収蔵していた理由の一つであろう。

また、河野氏は同書に次のような記述を残している。

余平生ノ願、読書ニ外ナラズ、富貴ハ人ノ欲スル所ナレドモ、読書ヲステ、ハ望マズ。カクアラバ、多ク珍書ヲ集メ、大ニ士ヲ養ハント思フノミ。

林田藩の藩校致道館で教授を務めていた彼は、読書を好み、自らが集めた本によって藩士を育てたいと思つてゐた。

『振觚』や『鉄兜遺稿』には、『巾箱小品』に関する記述は見当たらないが、以上のことから、河野氏にとつて『巾箱小品』は、「珍書」の一つであつたかもしれない。

### おわりに

以上、「唐六如先生文韻」（才子文）の収録状況や版本と鈔本の関係について論述したほか、その日本における受容についても考察を加えた。その結果、鈔本である『西

廂制義』は、『巾箱小品』所収の「才子文」や、清末に刊行されたいくつかの『第六才子書』版本に収録される「唐六如先生文韻」より成立時期が早いこと、また、その内容は科挙制度に対する作者の不満を含んでいることなどから、元々これらの十六篇の八股文は清人が商売のために新たに作つたものではなく、唐寅自身の作である可能性も決して否定はできないことを具体的に述べた。

一方、『巾箱小品』所収の「才子文」は、『西廂制義』の題目を当時最も流通していた金聖嘆の『第六才子書』と同じものに変え、「才子文」が八股文の勉強に有益であるように見せるため、祝允明の序文にも手を加えた。さらにのちになると、いくつかの『第六才子書』版本は、『西廂制義』と「才子文」を参考にしつつ、それらの十六篇の文章にさらに手を加えて収録した。

『西廂制義』の題名及びその標目は、明刊『西廂記』と合致するところがある。また、唐寅の時代に刊行された『西廂記』には、すでにその中の登場人物について論じる文章も収録される。こうしたことや、唐寅、祝允明二人の事跡を含めて考えると、大木氏が指摘するように、唐寅と『西廂記』八股文、或いは『西廂記』と八股文そのものの関係はより古い時代まで遡ることになると考えられる。

これら十六篇の文章は、中国ではいくつかの『巾箱小品』や『第六才子書』版本によって人々に読まれたのに対し、日本ではそれに加え、和刻された『巾箱小品』に

よつても読まれたと思われる。当時の日本人の『西廂記』に対する興味、唐寅や書画に対する愛好が、『巾箱小品』が和刻された要因だと考えられる。ただし、江戸後期の文人は積極的に『西廂記』を読んだり勉強したりしてはいたが、『巾箱小品』所収の「才子文」は、科挙制度のない日本ではそれほどの影響力は持たなかったようである。

### 注

[1] 黄霖『西廂』名句為題之八股文的文論価値」（『文芸研究』

二〇一一年第七期、『文芸研究』雑誌社、二〇一一年）。原文は以下の通り（以下、論文、著書、資料の引用文は原則として全て常用字体に改める）。「清代康熙年間、尤侗用八股体作『怎当他臨去秋波那一轉』、得到了皇上的贊賞、一時『名噪上林』之后、涌现了一批以八股形式贊評『西廂記』名句的系列文章。它們都以『西廂記』中的名句為題、如『怎当他臨去秋波那一轉』、『隔牆兒酬和到天明』（中略）等等。這種以『西廂記』中的名句為題目作專論的、始見于明代万曆八年（

1580）徐士范刊『重刻元本題評音釈西廂記』本。（中略）清代自尤侗用八股体作『怎当他臨去秋波那一轉』之后、緊接着黃周星積極呼応、就『怎当他臨去秋波那一轉』一題連写六篇、名之曰『秋波六芸』。此后効法者日衆、出有專集多種、如有錢書の『雅趣藏書』、題『念庵居士輯、祝枝山評』的『唐六如先生文韻』、題『太史陳維嵩其年訂』的『才子西廂醉心篇』等等、且往往附刊于『西廂記』中広為流伝。」

[2] 王穎氏は「清代特殊的文学現象…戯曲与八股の契合一以『西

廂記』制芸為例」（『南京師範大学学报（社会科学版）』二〇〇八年第三期、南京師範大学学报編輯部、二〇〇八年）で『巾箱小品』収集了一些前代的風雅小品文、『西廂』制芸在其中被偽托為唐伯虎所作、并有偽造的祝允明序。」と指摘する。また、王穎・黄強『遊戲八股文研究』（武漢大学出版社、二〇一五年）第三章『西廂』制芸及其版本研究」第二節『雅趣藏書』与『才子西廂醉心篇』には「清代諸種『西廂』制芸版本署名偽托明代文人唐伯虎、這又是一個十分耐人尋味的問題。」とある。

[3] 前掲注[2]書第三章『西廂』制芸及其版本研究」第三節『西廂』制芸的版本種類」に「（筆者注『唐六如先生文韻』極有可能是一些写手文人或書商所為」とあり、『唐六如先生文韻』の新題創作無非是為了吸引更多読者の眼球、以求最大限度地牟取利潤。」とある。

[4] 『原文で楽しむ明清文人の小品世界』（中国書店、二〇〇六年）第一章「試験問題で遊ぶ―唐寅『我是箇多愁多病、怎当他傾国傾城貌』」。

[5] 「長崎船載唐本書籍元帳」巻九（国立国会図書館蔵）に『巾箱小品』一部「一包」が嘉永三年に伝来した記録が見られる。

[6] その和刻本の影印本は現在西川寧・長沢規矩也編『和刻本書画集成』第十輯（汲古書院、一九七七年）に収録されている。

[7] 前掲注[2]書第三章『西廂』制芸及其版本研究」第三節『西廂』制芸的版本種類」の『西廂』制芸版本四大系統状況表」から抜粋。さらに、両氏の調査を補足すると、民国九年に掃

葉山房が刊行した『絵図西廂記』にも「唐六如先生文韻」が収録されている。

- [8]『巾箱小品』は、上海圖書館編『中国叢書綜録（新版）』第一冊（上海古籍出版社、一九八二年）には「清華韻軒刊本」しか収録されていないが、筆者が調べたところでは、この華韻軒版自体にも異同がある（例えば、目録には、「西廂記酒令」は第二冊の最後に収録と記載されており、九州大学附属図書館雅俗文庫所蔵本ではその通りになっているが、実際には第三冊の初めに収録されているものもある（上図本、筑波大学附属図書館所蔵本）。）。ただしここでは、とりあえず同一版と見なす。

- [9] 広西師範大学出版社、二〇一〇年。

- [10] 唐寅は試験問題漏洩事件の影響で、生涯解元までにしかなかった。この事件については、内山知也「唐寅の生涯と蘇州文壇」（『文芸言語研究 文芸篇』第三卷、筑波大学文芸・言語学系、一九七九年）、中山八郎「唐寅と考試」、「弘治十二年會試の策題第三について―『唐寅と考試』訂謬」、『唐寅と會試―弘治十二年會試策題第三について―再訂』（『明清史論集』汲古書院、一九九五年）に詳しい。また、『西廂制義』所収の文章には、六股しかないもの（「你不合臨去也回頭望」）や二〇股を超えるもの（「從今後由他一任」）もあり、正式な八股文の体裁に合うものばかりではない。

- [11] 目録の題名は正しいが、文章の題目に誤植がある場合はある。例えば、前述した上図本の「蘭麝香仍在佩環声漸遠」と民国九年石印本『絵図西廂記』に収録される「虚名兒誤賺我」

は、目録ではこの通りに作るが、文章の題名は、それぞれ誤って「蘭第香仍在佩環声漸遠」、「虚名兒賺誤我」に作る。

[12] 『西廂制義』は東京大学東洋文化研究所倉石文庫所蔵本を、「才子文」は益田本を使用した。

[13] ここでは、『古本』『西廂記』彙集・初集』第七冊（国家図書館出版社、二〇一一年）所収『樓外樓訂正妥註第六才子書』を使用した。

- [14] ここでは、『国家図書館蔵『西廂記』善本叢刊』第十六冊（国家図書館出版社、二〇一一年）所収『三先生合評元本北西廂』を使用した。なお、本書の目録では、前十六套の標目は「奇逢」「飯館」「倡和」「目成」「解困」「初筵」「停婚」「琴挑」「伝書」「窺簡」「踰垣」「問病」「佳期」「巧辯」「送別」「驚夢」となっているが、ここで「完全に一致している」と言うのは、目録の標目ではなく、各套に見られる標目についてである。

- [15] 『辛丑紀聞』（于浩『明清史料叢書八種』第八冊所収、北京図書館出版社、二〇〇五年）に「聖歎以世間有六才子書。『離騷』、『莊子』、『史記』、『杜工部詩』、『施耐庵』、『水滸伝』、『王実甫』、『西廂記』。歳甲申批『水滸伝』。丙申批『西廂記』。亥子間方從事於杜詩、未卒業而難作。天下惜之、謂天之忌才、一至于斯。（聖歎）以へらく世間に六つの才子書有り。『離騷』、『莊子』、『史記』、『杜工部詩』、『施耐庵』、『水滸伝』、『王実甫』、『西廂記』。歳甲申『水滸伝』を批し、丙申『西廂記』を批し、亥子の間に方に杜詩に従事するも、未だ業を卒へずして難作おこる。天下之を惜しみ、天の才を忌むこと、一に斯に至ると謂ふ。」とあり、また、傅惜華『元代雜劇全目』（作家出

版社、一九五七年）に『第六才子書』の版本について、「清順治間貫華堂原刻本、書名『貫華堂第六才子書西廂記』、八卷、清金人瑞評。傅惜華蔵、又吳梅旧蔵。」とあることから、金聖嘆は順治十三年（一六五六年）に『第六才子書』を完成し、同じ頃にそれを刊行したと考えられる。

- [16] 『柳南隨筆・続筆』（中華書局、一九八三年）所収。

- [17] 『茶香室三鈔』（『茶香室叢鈔』第三冊、中華書局、一九九五年）卷二十三「李日華西廂」。

- [18] 『吳梅全集』理論卷・下（河北教育出版社、二〇〇二年）所収『奢摩他室曲話』。

- [19] 祝允明は唐寅と同様、一生會試に合格することはなかった。『明史』祝允明伝に「以弘治五年舉於鄉、久之不第。（弘治五年を以て郷に挙げらるるも、之を久しくして第せず。）」とある。

- [20] 何大成『唐伯虎先生外編』（『統修四庫全書』第一三三四冊、上海古籍出版社、二〇〇二年。）卷一「詠美人八首」其八「鶯鶯待月」に「閨門出入有常經、女子常須燭夜行。待月西廂誰倡始、至今伝説欠分明。（閨門 出入するに常經有り、女子常に須らく燭もて夜行すべし。待月西廂 誰か倡へ始めん、今に至るも伝説 分明を欠く。）」とある。

- [21] 筑波大学図書館所蔵『元氏長慶集』（万曆甲辰序）補遺卷六。
- [22] 何氏は前掲注「20」書総目で、「伯虎著作是繁、俱散佚不伝。至其率爾題詠、人皆什襲蔵之。不佞。無繇遍閱茲編、特其万分之一。（伯虎の著作まことに繁なるも、俱に散佚して伝はらず。其の率爾の題詠に至りては、人皆什襲して之を蔵む。佞な

らず。繇よりて遍く茲の編を閱する無く、特だ其の万分の一のみ。」と述べる。

- [23] 例えば、遠山荷塘は江戸で『西廂記』の読書会を開いていたが、そこには朝川善庵や大窪詩仏などの著名な文人が参加していた。また、田能村竹田や曲亭馬琴も『西廂記』を読んだことがある（拙稿「江戸における『西廂記』の伝来とその受容について」（『中国学研究論集』第三四号、広島中国文学会、二〇一六年）を参照。）。

- [24] 西川寧・長沢規矩也編『和刻本書画集成』第五輯（汲古書院、一九七八年）には、弘化四年（一八四七年）畊雲堂刊嘉永元年（一八四八年）序印本が収録される。そこには、野田笛浦、大槻磐溪、安積良斎の序が付いている。

- [25] 『南海先生文集』（富士川英郎編『詩集日本漢詩』第一卷、汲古書院、一九八五年）巻四。

- [26] 『田能村竹田全集』（国書刊行会、一九一六年）所収。

- [27] 現在京都大学附属図書館所蔵の和刻本『巾箱小品』には「播州林田河野絢夫」の印が見られる。

- [28] 森銃三・北川博邦編『続日本随筆大成』第三卷（吉川弘文館、一九七九年）。